

福竜丸だより

— 都立・第五福竜丸展示館ニュース —

(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

おりない原爆手帳

武政 博

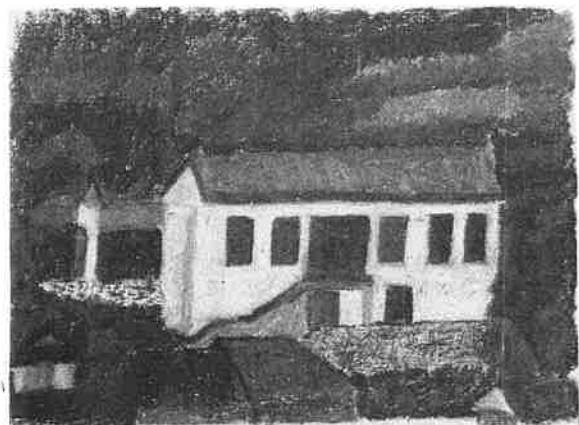
南太平洋とひとしく燃える
長崎の療養所の夏に
ザンザつくスコールはないが
ザンザつく蟬時雨はおちる

あなたはその床で
三十年の被爆と戦い
— 水爆被害者 — と認めない
行政との戦いも十年がきた

あれは三十年前
貨物船・弥彦丸の甲板で被爆した

あなたがたは陸揚げされ
あなたは認定されたが (保文発第九一〇二)

それから二十年
あなたの船員保険は打ち切られた
なぜなら国家は
「原爆医療法」は
広島と長崎の被爆者に限ると
したからだった



ありし日のスケッチ (画・平三義氏、長崎県
小浜国立病院の病室から。1985年8月)

それから十年
あなたは被爆者でありながら
原爆手帳がおりてこない
おりてくるのは
長い三十年の痛みと
老いる声の切なさだ。

— 貨物船・弥彦丸・甲板手・平三義氏の証言から —
『反核平和詩集』 (詩人会議編) より
※ビキニ被災船「弥彦丸」の元船員、平三義さん(七二)
が今年の一月二五日亡くなられたことが、夫人から
の手紙で知らされた。長い病気のたまたかの後、おり
ない、原爆手帳を手にすることなく、平さんは亡くなった。

来館者の 声から



先日ソ連で原発事故が起き、放射能の恐ろしさを感じましたが、今日ここに来て、科学が利欲のために使われることが、どんなに人間を否定するものになるのか実感させられました。人間らしく生きれる科学を私達は追求していくことが求められていると思います。

今日は、新英語教育研究会の後援で訪れたアメリカのシアトルの高校生、教師十六人と一緒に来しました。彼らは平和について二年間学び、アルバイトをして旅費をつくり、広島原爆記念館を見学するために来ました。

＊

私たちは草加市公民館で、昭和史の学習をしているサークルです。六月の例会は散策を兼ねて「第五福竜丸展示館」を見学する目的でやってきました。福竜丸に限らず、昭和史の中ではないことも平和問題にぶつかり、知らなかったこと、知らされていなかった多くのこと

を知る機会が与えられてきました。民衆の小さな声忘れかけていた魂をよびおこし、少しずつ輪を広げ、平和のために自分に何ができるか考えていけたらと思います。これからも真実にふれ、学びつづけていきたいと思えます。(文章サークルあがり、七名)。

＊

今日初めて、こちらの展示館を訪れました。微力ながらも平和運動をさせて頂いている私にとって、第五福竜丸との出逢いは、人命の尊さを強く感じさせてくれました。中学校三年の時、本土復帰前の沖縄を、第七次本土沖縄豆記者交換学生として、高知県より派遣して頂き、初めてみた米国統治下に置かれていた沖縄の姿、米国基地のようす。南部戦跡で感じた人命の尊さ、その後広島、長崎を訪問。年々強くなっていく平和の尊さ。

平和の尊さを感じたとき、私達一人一人には一体何ができるのでしようか。一人でも多くの人々と一緒に考えつづけ、そして自分ができることから行動に移したいと思えます(今城章雄)。

＊

私たちの学校では毎年、校外学

習という行事を行い、そのいくつかあるコースの一つにこの第五福竜丸があります。今年、中一、三年、二二名がうかがいました。ふだん、あまり問題意識をもたない子ですが、説明を聞く時の真剣な目つきを見て、教師である私もうれしく感じました。来年もよろしくお願い致します(市川市日出学園中学 岡本恭子)。



【紹介】
全米地理学会が発行する著名な月刊雑誌「ナショナル・ジオグラフィック」の86年6月号が「A・WAY・OF・LIFE LOS T・BIKINI」の特集。第五福竜丸展示館も紹介されている。

世田谷区の島田治芳さんからダンボール一杯の蔵書が贈られた。原水爆に関する書籍約50冊で、中には現在ではほとんど手に入らない貴重な写真集、『原爆の長崎』『原子爆弾の記録』『土門拳・ヒロシマ』(初版本)などもあり、展示館の原水爆資料小文庫を飾った。ありがとうございました。

編 集 後 記

▼一冊の詩集が書店で目についた。「反核平和詩集」。パラパラとめくると、武政博さんの作品「おりない原爆手帳」が載っていた。その本の重さを平さんに伝えたいと思った▼昨年八月、二年ぶりに平さんと入院先の長崎県国立小浜病院でお会いした。「声が細くなってきた」と残念そうだった。それから半年後、平さんはひっそり亡くなられた▼七月に入り、平さんの死を伝えるちみ夫人の手紙と前後して、武政さんの手紙が届いた。「あなたの声が訴えを、いつかきくと、わかってもらえる時の来る、そう思って運動している人間がいると平さんにつたえて下さい」と▼平さんの死は大きな波紋となっており、いつまでも脳裡を離れない。

●100万人参観者運動を!

86年6月来館者数	6,355名
通算1ヵ月平均来館者数	5,410名
当月1日平均来館者数	254名
通算来館者数	654,586名



イバイの埠頭から米軍のフェリーでクウェゼリン基地に通う労働者たち。弁当を持参し、帰りには水不足のイバイの家族のために、飲料水を運ぶ労働者が多い。

太平洋のスラムリーバイ島は、人口過密、非衛生、貧弱な都市施設だけが目立つばかりではない。イバイのもう一つの特長は、この島の経済を支えているクウェゼリン基地で働く「労働者」の存在だ。彼らはミサイル打上げ、衛星通信など最先端技術の基地で働くことで、米軍の人事管理や差別待遇の中から多くのものを学んでいる。



写真・文 島田 興生

<6>

クウェゼリン基地には衛星中継の米本土のテレビ放送が送られてきており、イバイでも世界の最新ニュースを受信できる。ホットな情報やニュースに事欠くマジックロやマイクロネシア各地とは比較できない程イバイの住民はその点では「進んでいる」。失脚寸前のマルコス動きやスペースシャトルの爆発事故などは日本のニュースよ

り数段生々しく、イバイの「お茶の間」に流れていた。
私のイバイ滞在中、KAC(クウェゼリン環礁組合)が基地使用料の値上げを要求してクウェゼリン内に座りこんだ。KACはこのもとの自分たちの島での座りこみ闘争を「オペレーション・ホーム・ゴイング(帰郷作戦と叫んでいる。第二次大戦中、旧日本海軍の潜水艦基地だったクウェゼリンを占領した米軍は、日本軍同様、基地使用の住民の合意もとらず、使用料を一銭も払ってこなかった。一エーカー(〇・四町歩)当たり約十ドル(百年間で)の「涙金」が支払われるようになったのは一九六〇年代後半になってからだ。イバイで会ったKAC代表のアタジ・バロス議員は「現在でも土地使用料は六〇〇〇人の地主で頭割りすると一人当たり四〇ドルしかない。食べ物がなく飢え死にしたというものはウソではない」このためKACの闘いは島ぐるみ、家族ぐるみで、基地の盛りこみも婦人、老人が主体だった。座りこみは二カ月続いたが、米政府は回答を拒否し続け、結局四月二十二日 マジックロの中央政府の

警官隊に強制廃除された。
これに怒ったイバイの住民は埠頭を連日数百人のメンバーで占拠し、クウェゼリンに向かう基地労働者のフェリーの運航をストップさせてしまった。労働者を失ったクウェゼリン基地の機能がダウンするか、食料、給水をストップされたイバイが先に音を上るか、カタズをのんで見守ったものだ。占拠は約十日間で、マインシャル大統領が話し合いに入り中止になった。しかし、米国の核戦略のどど元にくらいついた、イバイの闘いは終る気配を見せない。
ロンゲラップの放射能を逃れた人々もいまクウェゼリン環礁の一角に住む。全員で故郷の島を捨てるといふ果敢なアピールで放射能禍を訴えた人々と、核ミサイル基地で働く人々の運動はいずれ一体になるに違いない。彼らの訴え、その闘いの一つ一つのプロセスは海を通じて世界の人々とながっているのをマインシャルの人々は自覚しはじめている。
今後とも、第五福竜丸の向う側に関心を持ち続けていただくことを希望して、この連載を終えたい。
(おわり)



第五福竜丸展示館は、六月十日開設十周年を迎えた。東京西多摩瑞穂小学校四年生百五十名の子どもたちの明るい声と瞳、夢の島の野草を愛で俳句を詠む人々の「死の灰」に注ぎきびしい目、テレビのライト、インタビュアーに答える乗組員大石又七さんの静かな声。とくに目新しさのない一日の中に、一日一日積み重ねてきた十年と多くの人々の労苦を偲んだ。

第五福竜丸展示館開設十周年おめでとう 多彩に記念集会、船体修理完成も祝う

これより先の六月九日、東京神田の学士会館で、平和協会主催による「第五福竜丸展示館開設十周年記念集会」が盛大に開かれた。第一部の記念講演は、三宅会長のあいさつについて、元日本YWCA会長で協会評議員の関屋綾子さん、立教大学教授で協会評議員の小川岩雄さんが講演。関屋さんは「平和への道標―第五福竜丸の語るもの」と題し、国民的な原水爆禁止運動の誕生から、現在の核兵器廃絶をめざす運動の課題と高揚にふれ「船は人々に今日の時代への覚醒を求めてやまない」と指摘。

ただいま展示品九一一点 目録もできて展示替充実

六月末、昭和61年度第一回の展示替が行なわれた。六月の展示館開設十周年にむけ作成した「第五福竜丸展示館所蔵品目録」が大いに役立ち、新しく作成した写真パネル等も含め、今回の展示替によって館内に展示されたものは合計九一一点となった。

服部学・壬生照順さんのコメントと共に大きな感銘を与えた。小川岩雄さんは「第五福竜丸と科学者」と題し、ラッセル・アインシュタイン宣言からパグウォッシュ会議核開発と抑止論、SDIまで広く総括的な話をし、「船は絶えず新たな教訓と警告を科学者に与えている」と結んだ。講演に対し、内山尚三さん、栗野鳳さんがコメントを行なった。
第二部は、華かな記念パーティで船体修理完成のお祝いも兼ねた。十年前の展示館建設とそのため船体移動工事、そして今回一年余に及んだ画期的な修理工事と社あげて取り組んだ落合組の社長落合巖さんが、切々と当時を偲び祝辞と乾杯の音頭をとり、船と展示館

の新しい門出を祝した。
東京都知事(メッセージ)、都建設局、南部公園緑地事務所、夢の島公園管理所等関係者はじめ、各界各層の人々八十人余が出席。福岡の裏辻敦子さんは「全国すべての子どもたちが一回は福竜丸を目にすることを」と述べ、高崎から駆けつけた元浅草魚商組合の前沢菊治さんは「あの魚屋殺すにや刃物はいらぬビキニの灰降りやおだぶつだの署名は私の文案」とお久しぶりねあなたに合うのは―と手ぶり身ぶり歌を披露。関寛治東大教授は、いま全大学は福竜丸ならぬ平和の船を建造すべきだなどユニークな「提言」……。そのたぐさんの祝辞と参加者の多彩さの中に、運動の統一を瞳のように大切にされた保存運動と展示館の広さがにじんんでいた。
ほろろぶ夾竹桃、久保山
記念碑前に花水木
六月一日の日曜日、前日広島への平和行進を見送った久保山記念碑前で、群集の渦の青年が集いを持ち、以後日曜毎に江戸川区の被爆者高木さんが一人碑を囲む夾竹桃の刈り込みを続けた。月末碑の前に花水木の若木を一本植樹。